私はサムス・アラン。フリーのバウンティハンターとして活動している。
とある依頼を受けた私、辺境にある廃棄された小型コロニーへと潜入した。
その依頼とは、違法な生物兵器の開発が行われているという証拠を探る事だ。
そのため、私は隠密性を重視し、いつものパワードスーツは装備せず、
ゼロスーツのみでコロニーへと潜り込んだのだ。

【サムス】「…こんな所で生物兵器の開発とは…」

コロニー内部は、生物が生存可能できる環境が維持されている。
しかし廃棄されたコロニーで、このような環境を維持する事などありえない。
ほぼ間違いなく、よからぬ事が行われているという証拠だろう。

【サムス】「それにしても蒸し暑いな…それに妙な匂いもする」
生物兵器開発の環境か、コロニー内部は妙に暑く湿度が高い。
さらには特定の植物が発するような、甘ったるい腐敗臭も充満している。
この時点で証拠を掴んだような物だ。私はさらに調査を進める。
【サムス】「はぁっ…はぁっ…」
暑さによる発汗のため、スーツが肌に張り付く。
乳首や股間にスーツが張り付き、くっきりと浮き上がらせてしまう。
こんな時にパワードスーツがあれば…そう思わずにはいられない。
私は少々苛立ちながら、さらに深部へと足を進めていく。

【サムス】「こ、この区画は…!?」
私は甘ったるい腐敗臭の元を探し、奥へと進んでいった。
恐らく廃棄された生体ゴミ等があるのだろうと考えていたのだが、
そこで発見したものは、私の予想を大きく裏切るものだった。

【サムス】「壁一面の…肉塊だと…?」
その区画の壁は、赤黒い触手に覆い尽くされていた。
その触手は脈動し、先端から甘ったるい腐敗集のする汁を滴らせている。
…ここにいるのはまずい。
私の本能がそう告げた直後、出入口の扉が肉壁によって閉じられてしまった。

【サムス】「くっ…近寄るなっ…!!」
予想通り、壁一面の肉塊は、私に向けて複数の触手を伸ばして来た。
私はそれを振り払いながら、別の出口を探して区画内を駆け回る。
1本1本の触手はさして強靭ではない。
私の体術があれば、普通に引きちぎる事は可能だ。
…しかし、その本数が多すぎる。
私が1本いなす間に、2本が襲いかかってくるのだ。
これではキリがない、早く脱出しなければ。
焦る私をあざ笑うように、触手は私を追い詰める。

【サムス】「ぐあっ…!?」
逃げ回る私に、ついに触手が絡みついた。
左腕と右足に絡みつかれ、動きが鈍る。
【サムス】「うぐっ…このっ…!! 離せっ!!」
私は思わずそう叫んでもがく。
しかし、触手は明らかに知能が無く、誰かの命令で
動いている様子もない。叫んでも無駄だった。
触手は私の全身に絡みつき、私の動きを拘束した。

【サムス】「くっ…」
私は両足を開かされた状態で拘束された。
こんな体勢で拘束されては、身動きが取れない。
私は触手が緩まないかと必死に体をよじるが、
その動きは触手を食いこませるだけだった。
こいつは私をどうするつもりなのか、
嫌な想像が頭をよぎる。
そして触手は、そんな私の想像を
現実のモノとすべく、1本の触手を
私の口元へと近づけた。

【サムス】「むぐうっ!?」
私の口元に近づいた触手は、私の口内へと侵入した。
私はそれを噛み切って吐き出そうとするが、
弾力の強い触手を噛み切る事が出来ず、触手内部にある
甘い匂いのする体液を大量に分泌させるだけの結果となった。
そしてその結果、私は触手の体液を大量に飲み込んでしまった。
こんな得体の知れない生物の体液を摂取した私は、一体どうなってしまうのか。
私はその答えを、すぐに身をもって思い知る羽目となった。

【サムス】「こ、この感覚は…!?」
触手の体液はすぐに胃袋から吸収され、体中を駆け巡る。
私の体はそれに反応し、心拍数が高鳴っていく。
同時に全身は発熱し、子宮が疼き、膣が湿り気を帯び始める。
…間違いない。発情している。それもかなり強烈に。
何とか体をよじって逃げようとする私に、
触手は細い毛の生えた触手を新たに近づけてきた。

【サムス】「うぐっ……！　あっ!!」
触手はゼロスーツの上から、私の割れ目に毛を這わせた。
体にぴっちりと張り付いたゼロスーツは、
触手からの感触を損なう事無く、私の体に伝えてしまう。
こんな醜い肉塊に弄ばれているにも関わらず、
発情した私の体はそれを快楽として受け入れ、メスの声を漏らしてしまう。
早く何とかしなければ……。私は快楽に身をよじりながら何度も脱出を試みた。

【サムス】「っ…ゼロスーツが!?」
何度も何度も触手に愛撫されている間に、
触手の分泌液が私の股間に大量に塗り付けられていく。
その分泌液で、ゼロスーツが少しずつ溶かされていたのだろう。
ついに限界を迎えたゼロスーツが破れ、ぽっかりと穴をあけた。
その穴からは、興奮して半開きになった私の性器が露わになり、
強烈なメスの匂いを放つ、粘り気の強い愛液が溢れ出して来たのだ。

【サムス】「くそっ…!! こんな所で、化け物相手にやられてたまるかっ…!!」

私を発情させた事も、性器を露出させた事も、考えるまでもなく、愛撫した事も、目的は明確だろう。こいつは人間の母体に種付けする事が目的で作られた生物兵器なのだ。無防備に開いた私の膣口に、種付け用の触手が迫ってくる。逃げなければ。しかし発情した私の体は、それを求めてしまっている。

《ズチュウウウウッッ!!》
『サムス』『くっ…あああああっっ!!』
触手は私の濡れた膣内に、その肉棒を突き刺した。
生物兵器の肉塊相手に犯される屈辱。死んでしまいたいほどの辱め。
しかし何より私の心を傷つけたのは、触手の体液の効果であるとは言え、
こんな行為を快楽として受け止めてしまっている事だった。

《ズチュッ!! ドチュッ!!》
『サムス』『やめっ…ひっ!! あっ!!』
触手は膣深くに潜り込み、強引に内部を押し広げながら、
子宮口を激しくノックするように、私の胎内を貪り犯す。
こいつは私の事を女とすら認識していないだろう。
ただ、苗床に都合の良い肉袋を犯し、広げ、種付けしたいだけなのだ。
そして私の子宮口は、それに応えるように、少しずつ広がり始めていたのだ。

そして触手は、私の子宮口を充分にほぐした後、
私の神聖なる子宮内部へと潜り込んだ。
《ヌプンッ!!》
『サムス』『お…?! おぁっ!?』
今までの快楽とは質の違う快楽が叩きこまれた。
子宮の中など痛みしかないはずなのに、なんだこれは??
私の脳が混乱している。思考が纏まらなくなってしまう。